



TITLE:

臺灣日蝕紀行(2)

AUTHOR(S):

井本, 進

CITATION:

井本, 進. 臺灣日蝕紀行(2). 天界 1942, 22(249): 87-91

ISSUE DATE:

1942-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168343>

RIGHT:

臺灣日蝕紀行 (2)

井 本 進

9月19日(金)

一夜は明けた。内地の島は視界より没し去り、一望水天の大海原だ。明後日に迫った天氣が少し氣になり出した。ブリッジに行き、天氣豫報の入電を見る。海南島沖に發達して來た754耗の低氣壓が最も注意すべきものだ。

此の一日は太陽高度を測定し航行する爲めブリッジにて天測を行つて居る。高砂丸に乗り合した機會に之を見學する事が出來た。ブリッジのクロノメータ(時計)はグリニッチ平均時を示して居る。それで、我々が此の時計に時間を合はす時は時差九時間を加へ、此日は誤差33秒を引くのである。(日々船の進行により此の値は變化する)ラヂオの時報に自分の時計を合はしては此の方法でクロノメータの示す時刻と突合せた。

飯氏の御紹介で吉田長祥氏に會つた。其時、同氏の筆にかゝる「神秘の皆虧日蝕を見る」なる昭和11年の北海道日蝕に關する感想文を贈られた。又、其際、飯氏執筆の前回日蝕の紀行文及新聞切抜きなどを拜見する機會を持つた。

話は明後日に迫った日蝕觀測のことにて持ち切りであつた。まだ同行の人々が同船して居るかも知れないので、集めて見る事になり、事務長に交渉、午後一時半より二等食堂に於て山本一清博士の日蝕に關する講演會を開く事となつた。船内に備へ付けのラヂオにて全乗客に通知を發した。定刻より日蝕に關する山本博士の講演會が始つた。聴衆約150名餘り、1時間位にて終り、引續き下記の人々だけで打合せ會を開催した。

山本會長、藤瀬教授、坂上、吉田、同令嬢、飯、渡木、井本以上8名であつた。

議題は 一、場所 二、機械 三、觀測プログラムの三であつた。

肝心の臺灣に於ける交通の便が不明の爲め、全部決定する迄に至らなかつたが、大體下記の通りである。

1、觀測場所は基隆又は臺北に到着の上決定すること。

宿舎は適當な國民學校を借る豫定。

朝晝晩の食糧携行のこと。バナナなど用意してもよい。

2、觀測機械

山本博士がクロノメータを携行される故、夫れを使用すること。鹿兒島の坂上君が學校のクロノメータを持參故、之れが使へれば、二班

に分れ、2~3里離れて観測のことを考慮したが、山本博士が右時計を点検された結果、日蝕観測用として不適當なること判明した。従て一同一個所に集ることになった。

更に時計係を選定すること、皆既中の用意に懐中電燈を用意することなど決定した。

3, 観測プログラム

- 1, 第一觸(初虧)の時刻測定.
- 2, 第二觸(食既)の時刻測定.
- 3, 皆既の始まる1分前より注意すること、皆既より前に既にコロナが見える.
- 4, ベリリビーズ, プロミネンス, コロナ等を見るには二三十倍の望遠鏡が適當なること.
- 5, 皆既日蝕の寫眞を撮るなれば 焦點距離がなるべく 長い寫眞機により2枚又は3枚とること, 絞りはF20で1秒内外の露出が適當であること.
- 6, 寫眞よりも肉眼にて外部コロナ, 内部コロナ, プロミネンス, 更に黄道光などを観ること.
- 7, 皆既中の明るさはコロナの光以外は眞暗闇となる.
(急に暗くなる爲め). 地平の方は少し明る見える.
- 9, シヤドバンドは白い大きな紙又は布を平らに敷いて観測する.
- 10, 暗室の中に這入り, 急に跳び出して來て皆既中のコロナの観測をすることも甚だ興味ある實驗が出来ること.
- 11, 第三觸(生光)及第四觸(復圓)の時刻測定.

大體以上の諸點について研究し打合せをした。

結局、山本博士以下、藤瀬教授、坂上、渡木、筆者の5名が今回の観測行に同行することになったのである。

そして吉田氏は基隆林本源邸にて、飯氏は御仕事多忙の爲め九月21日の日蝕皆既の當日午前11時基隆出帆の郵船富士丸に乗つて歸國される豫定で、同船がアジノコト島附近を通過する際、皆既蝕觀望のことにされた。夕刻日没の際山本博士はグリーン・フラッシュ(綠閃光)を見やうと云つて居られたが、雲が少し多かつたため筆者は觀望出來ずに終つた。明日は御別れと云ふので、同じ船室のもの6名打寄り、夕食にはビールを汲んだ。

臺北の佐土原管事代表取締役佐土原吉雄氏と天文に關する談話に夜の更けるを覺えず。12時過ぎ就床する。

9月20日(土)

今頃東天に見える黄道光を觀んものと、早朝4時頃起き出でたが、生憎曇天にて星影すらなく、又床に戻る。

愈々上陸の朝が來た。11時頃船が基隆につくとの事である。夜が明けるに従つて、空は晴れて來て、よい朝だ。間もなく彼方の水平線上にアジンコ1トの島が見えて來た。

又ブリッジを訪れ、天氣豫報の電報を見て、天氣圖を作る。海南島にある752耗の低氣壓が依然氣になる。臺北は曇、2米の東北東の風であるとの朝6時の入電である。

アジンコ1トの燈臺が見え、島が間近に見えて來た。一面、縁につままれた綺麗な島であるが、臺北氣象臺の窪川技師外日蝕觀測の一行は此の島の何處ら邊りに布陣して居るのだろうか？ 間もなくアジンコ1トも遠ざかつて行き、又基隆島が現れ、次第に近づいて來る。

高砂丸は商船の戦闘艦とも云はれる快速船で、基隆に豫定よりも早く着く爲め、速力を抑へつゝ航行して居るとの事であつた。基隆港の岸壁が手に取る様に見えて來た。ドンヨリした天氣だつた。基隆の方には多少雲があつたが、西方富貴角の彼方に目をやると、日が照つて居るのが觀望出來た。

新聞記者が數名山本博士を探し當て、取圍んで質問し始めた。乗客一同は下船し始めた。新聞記者との對談が終つて山本博士と下船、一先づ基隆驛の方に向つて出ることゝした。

驛頭にて臺北天體觀測同好會代表の吉村昌久氏と臺北放送局の服部氏の出迎へを受けた。茲で色々明日の準備を吉村氏より聞き、富貴角燈臺の下まで今日中に行く事、其の以前、一先づ臺北へ寄ることなど決定して、臺北行の汽車に乗つた。車中より過ぎ行く臺灣の風物に眼を注いだ。矢張り遠くへ來たと云ふ感じはするが、氣候も景色も阪神間に行く場合と差程大差ない思ひだ。臺灣特有の赤い煉瓦建の家屋のみが眼を惹いた。途中炭鑛から驛までトロツコで石炭を運んで居るのが見えた。

間もなく臺北驛に着いた。山本博士は日蝕觀測に關する明日の放送の録音に臺北放送局へ行かれた。放送局の自動車で今日中に富貴角燈臺下まで行かれるとのことにて、同乗する便宜を與へられた。自分は大きいトランク1個を持つて居たので、非常に好都合であつた。後、電話にて連絡することを約して、山本博士と別れ、筆者の勤務する會社の臺北出張所を訪ねた。遠くへ來て同じ社の人々と會ふのは嬉しかつた。臺北驛から眞直ぐに歩いて、鐵道ホテルの横を通り、突當りに總督府博物館の建物を見て右にあるのが其の事務所である。柳川主任外一同元氣で執務して居られ安心した。茲で泰、佛印に行かれる早稻田大學杉山助教授に會つた。店務を概略聽取し、再會を約す。筆者は、日蝕が濟

めば直ちに上海へ行く計畫をして居たので、飛行會社に上海行の飛行機の發着時刻を電話で問合せた處、軍の許可が必要とのことであり、又今まで軍人以外便乗出来た例がないとのことだったので、豫定を変更して、来る23日午前11時出帆の同じ高砂丸で歸ることにした。

又基隆要塞司令部金子氏に電話して、撮影許可證を使用しないことを話し、了解を得た。夫れは許可證に『渡臺と同時に司令部へ出頭すべし』との條項があつた爲めである。

臺北公會堂に行き、吉村氏に會ひ、茲で山本博士に御目にかゝる。又、大毎記者林、月澤兩氏に會ふ。放送局の自動車が廻される間、公會堂の上に作られてあるドームを拜見する。五藤光學製屈折10糎位の赤道儀で、なかなか立派なものであつた。公會堂は昭和12年に落成したさうで、誠に近代的宏壯な大建築である。1階に映畫場があつた。自動車が來たので、山本博士、吉村氏、服部氏、小生4人で富貴角まで長途のドライブに出發する。愈々淡水の町に出て、これからが臺灣のロカル・カラの濃く現れて居る地方なのである。土が赤く、空が澄んで青く、其のコントラストが何とも云へない畫材を提供して居る。赤い煉瓦の家々が點在し、田畑には水牛が居り、小川には家鴨が群をなして遊んで居た。鷺鳥が道路の中央に立ち、自動車の來るのも知らぬげに、追はれて始めて逃げるのも愉快であつた。家々の生垣には薄紫の藤の様な花が咲いて居るのが各所で見られた。2時間餘りたつて、砂丘に出た。もう富貴角は直ぐそこなのである。風がヒドク、砂は波立つて居た。沙漠の砂と同じである。目的地の燈臺が見えた。茲に明日に追つた日蝕皆既を見んものと、遠く内地から、近くは臺北附近から集つた人々が約40名も居る。着いて、直ぐ富貴角燈臺長佐田廣氏に御目にかゝる。聽て、明日の觀測地點を下檢分して後、富貴角に參集した人々の點呼をとる。そして同時に携帯の觀測機械の報告を受けた。(參集者名は略す、前號第58頁參照——編者)

集まつた人達の持ち寄つた機械は左の通りであつた。

携行觀測機械一覽表

西村	15糎寫眞反射鏡(寫眞)
坂上	7糎屈折鏡(眼視)
	他に自記氣壓計、通風溫度計、濕度計、小型クロノメータ1照度計各1、色眼鏡、スケッチ道具、クレパス等
渡木	双眼鏡8倍(眼視)
蔡	50糎屈折鏡(眼視)
水谷	38糎屈折鏡(眼視)
森安	6糎屈折鏡、双眼8倍プリズム(眼視)

富 谷	10 糎寫眞反射鏡(寫眞)
矢 野	25 糎屈折鏡(眼視) 燈臺にて觀測
吉 村	3 糎屈折鏡2臺(眼視)
和 泉	プリズム双眼鏡8倍(眼視)
細 谷	7.5 糎屈折赤道儀(眼視又は寫眞)
井 本	50 糎屈折寫眞鏡(寫眞)
	他に最高最低寒暖計、バロメータ(小型)
天満屋	フオルタン晴雨計(氣壓測定)、寒暖計(溫度測定)、乾 濕計(乾濕測定) 燈臺にて觀測

携行寫眞機一覽

相 原	35 糎映畫望遠9 糎付
小 山	35 糎映畫アイモ望遠レンズ裝備(觀測狀況撮影)
小 島	ロライコイド(觀測狀況其他撮影)
和 泉	オートセミ(地上の明るさを連續撮影)
井 本	9 糎小型映畫望遠レンズ裝備(日蝕其他觀測狀況)
坂 上	キャビネ寫眞機2臺(日蝕)

燈臺下にある官舎内にて今夜は一泊することゝなつた。

夕闇は次第に深くなり、遂に夜となつた。夕食は、こゝで臺北天體觀測同好會の人々の心盡しになるキャンプ料理の響應に預つた。食後、午後9時より同舎内にて親睦茶話會を開催する。集まるもの凡そ40名であつた。之は生涯よい思ひ出となることであらう。

先づ山本會長の挨拶に始まり、次いで順次自己紹介に移る。銘々趣味の話が出て、興味が盡きない。遂に豫定の時間を延長する。佐田燈臺長の挨拶があり、最後に筆者は此の機會に臺灣の天文遺跡、天文傳説、天文記録乃至傳記の調査につき、一同に助力を願つた處、色々と興味ある物語が發表された。

1. 臺北市萬華の黃三桂氏宅の隕石のこと。之れは時間があれば、研究の爲め訪問することゝした。
2. 臺北市一中寮の前に、24~5年前、或夜、午後8時頃音がして星が落ちたことを細谷氏が話された。
3. 又臺灣の某所には石に近づくとも磁石の端が其方を指す所があると云ふ。
4. 臺北地方最古の市街である新莊に70年前星が落ちて火災があつた。等々。

既に10時も過ぎ、明日の皆既日蝕を控へて居るので、解散。一同寢に就く。天氣が氣になつて眠れない。時々燈臺の下に出て、空を眺めた。天頂には木星やシリウスが互に光輝を競つて居るかの如くに燦然として見られた。然し、天頂以外は亂雲の包圍下にあつた。風は強い。誰かミカノイブスが見えたと云つて來た。又眠に就く。(つゞく)